

今年度大切にしたいキーワード

本研究計画作成試案では、県小教研会員の誰もが内容を理解できるように、各部会でレイアウトや解説の方法を工夫しています。

また、学習や研究を進める上で大切にしたい事項を「キーワード」という形で提案しています。

日常の学習指導や研究推進において、十分に活用していただきますようお願いいたします。

◆◆◆ 国 語 科 ◆◆◆

主体的・対話的に言語活動に取り組む

「主体的・対話的に言語活動に取り組む」とは、子供が自らの意思で進んで活動に取り組む中で、教材や友達等と対話しながら、言葉の意味、働き、使い方等について捉えたり、比べたり、問い直したり、共有したりして、学びを更新していくことである。子供が主体的・対話的に言語活動に取り組むためには、子供の実態を把握した上で、教材との出会いの場を工夫し、子供にとって必要感のある課題を設定することが重要である。そして、教材との十分な関わりを保障し、自分の考えをもった上で話し合う場を設定することで、分かったことと、分かりそうで分からないことを明確にしていく。そうすることで、子供は理解を新たにしたり、言葉について自覚を深めたり、次の学習で活用したりして、考えを深めていく。

指導と評価の一体化

「指導と評価の一体化」とは、指導と評価を連動させ、子供自身の学習改善と教師の指導改善につながるようにしていくことである。

国語科で資質・能力を育成するためには、まず、子供の学習状況や実態に応じて単元を構想することが重要である。次に、何を、どのように評価するかという評価規準を明確にする。さらに、授業を通して、教師が評価規準に基づいて子供の学習状況を的確に見とり、次の時間や次の単元等の指導を改善していく必要がある。また、子供自身が自らの学習を振り返り、次の学びに向かうことができるよう、教師は子供の実態に応じて適切な助言をするなど、子供の学習改善につなげていくことが大切である。

◆◆◆ 社 会 科 ◆◆◆

社会的な見方・考え方を働かせる

「社会的な見方・考え方を働かせる」とは、その子なりの着眼点やそれに基づいた考え、価値観を表出しながら対象とする社会的事象と向き合い、学習を進め、身に付けた知識と関連付けながら、その捉え方や意味付け方を吟味していく姿とする。

社会生活への理解を深めていく

「社会生活への理解を深めていく」とは、社会的な事象との関わりを繰り返し、互いに学んだことを共有しながら様々な立場から考えることで、多角的に事象を捉えていく姿とする。

このように上記に見られる経験を繰り返すことで、子供は社会に関心を持ち、その一員としての意識を高めたり、自分にできることを考えたりしながら、公民としての資質・能力を培っていく。

このような子供を育成するためにも、子供の実態把握と確かな事実認識に基づく学習過程や、支援のための評価の在り方について明らかにしていく必要がある。

そこで、今年度は次のことを研究の重点としていく。

- (1) 子供が社会的な見方・考え方を働かせて資質・能力を身に付けていくための教材研究の在り方
- (2) 子供が社会的な見方・考え方を働かせて資質・能力を身に付けていく学習過程の在り方
- (3) 子供の学習を支える指導と評価の一体化の在り方

◆◆◆ 算 数 科 ◆◆◆

主体的

「主体的」を、目的意識をもって数理的な事象に繰り返し働きかけ、自分の考えをつくり上げることとする。

対話的

「対話的」を、自分の考えを具体物、図、数、式、表、グラフ、言葉等を用いて表現し、自ら友達へ関わりを求めて伝え合う活動を通して、自分の考えを再構築していくこととする。

そのために、今年度は次のことを研究の重点としていく。

『問いをもち、数学的活動を通して考えを深めるための場の工夫』

- 互いの見方や考え方を理解し、考えのよさを感じ合える場
- 新たな視点から考えを見つめ直し、よりよい考えに再構築する場

このように、数理的な事象に主体的・対話的に関わり、数学的な見方・考え方を働かせる中で、新たな視点から自分の考えを再構築していく子供の育成を目指す。

◆◆◆ 理 科 ◆◆◆

資質・能力の育成

授業の目標は、資質・能力の育成である。見方・考え方を働かせることは、目標ではない。教材研究によって、単元を通して育成する資質・能力を明確にすることが大切である。また、毎時間のねらいとする資質・能力も明確にすることで、その時間に教師がうつべき手立てが具体的にになる。

「対話」の手立て

対話を通して育成される資質・能力は何か、それを授業者が明確にすることで、対話を支える手立てを講じることができる。また、子供が対話をする時、すなわち必要感をもって聞き合う時とは、「考えと
考えの比較」もしくは「考えと事象との比較」を通して、子供が矛盾を感じる時である。学級のすべての子供が矛盾を感じられる状況をつくることこそ、最も重要な対話の手立てである。

◆◆ 生活科・総合的な学習の時間 ◆◆

子供の様々な取組を想定する

教材に出会ったとき、子供はどのような関心や疑問をもち、どのような活動を求め、展開していただくかと考える。そして、取組において出会う様々な問題と、その解決を目指して子供が行う方法等、子供たちの取組を可能な限り想定する。

取組を見直し、充実させる話合いを工夫する

更なる納得を求めたり、自分のよさに気付いたりするとき、子供は自らの取組を見直し、充実させようとする。子供が自らの取組について考えることができるようにするためには、学級全体で友達の多様な思いや願いに触れ、その違いから学び合う話合い活動を効果的に取り入れたい。

◆◆◆ 音 楽 科 ◆◆◆

音楽と豊かに関わるための題材構成や教材選択の工夫

音楽の構造等を分析し、各領域や分野の関連を図ったり、必要な知識及び技能を身に付けるための常時活動を取り入れたりするなど、効果的な学習展開となるよう題材構成や教材選択を工夫する。

適宜〔共通事項〕を要としながら、効果的な学習展開となるよう題材構成や教材選択を工夫する。学校や地域の実態に応じたり、他教科と関連させた学習を横断的に展開したりするなど、題材構成を工夫することで、多様な音楽活動とのつながりを意識できるようにする。

主体的・対話的で深い学びにつなげるための学習過程の工夫

学習過程において深い学びを実現するために、子供一人一人が明確な課題と根拠をもって、自分の音楽に向き合い、自身の思いの変容を捉えることができるようにする。また、子供が聴き取ったことと感じ取ったことを関連付けながら、多様な音楽活動に取り組み、互いに対話を通して交流し合うことで、気付きを共有したり、感じ取ったことを共感したりすることができるようにする。

一人一人のよさや可能性が生きる評価の工夫

ねらいを達成した子供の姿を明確にした上で、題材のどの場面で評価するかを計画し、指導と評価の作成をする。また、指導と評価の一体化を図り、「子供にどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、指導の改善に生かしていくとともに、子供自身が自らの学習を振り返って次に生かせるようにする。

◆◆◆ 図画工作科 ◆◆◆

子供が造形的な見方・考え方を働かせ、つくりだす喜びを味わうための「表現の始まり」の工夫

題材名や題材との出合わせ方等の題材提示の仕方、材料や用具、場所等を吟味し、工夫する。また、子供が自他の取組や作品のよさを感じ取り、発想を広げたり活動意欲を高めたりすることができるよう、互いの思いやイメージ等を自由に交流できる時間や場、学習形態等を工夫する。

子供が造形的な見方・考え方を深め、つくりだす喜びを味わうための「表現の過程」の工夫

技法等の紹介や共有、試行錯誤できるような時間や場所の確保、子供の導線を考えた各コーナーの設置等学習環境の工夫に取り組む。また、子供が自他の表現のよさや美しさを感じ取り、自分の表現を見直したり、さらに工夫したりしていくことができるよう、支援を工夫することで、「もっとつくりたい」という意欲や自己肯定感を高めることにつながる。

子供が造形的な見方・考え方を働かせ、つくりだす喜びを味わうための「指導と評価」の工夫

教師が子供のイメージに寄り添い、共感的に指導・支援するためには、活動を通してその子供がどのような造形的な見方・考え方を働かせているかを捉えることが大切である。中でも教師の子供への声かけは、活動や作品へのイメージに大きく影響を与える。

◆◆◆ 家庭科 ◆◆◆

指導の効果を高める題材構成

子供の実態を踏まえ、育成する資質・能力を明らかにして、関連する内容項目や指導事項の組合せを工夫したり、学校行事や他教科と関連させたりするなど、指導の効果を高める題材構成を行う。その際、生活の営みに係る見方・考え方のどの視点を重視するかを適切に定めるようにする。

学びを深める手立て

学びを深めるには、子供が自ら生活の問題を見つけて課題を設定し、主体的に課題の解決に取り組むことが大切である。そのために、日常生活を見直す活動を取り入れて課題を設定できるようにする。そして、計画、実践、評価・改善という一連の学習活動を重視した問題解決的な学習を充実させ、学習した内容を実際の生活に活かす場を設定する。さらに、目的や視点を明確にした上で、考えの背景を話し合う場等をつくることで、対話的な学びを促し、自分の考えを明確にしたり、互いの考えを深めたりすることができるようにする。

指導と評価の計画の作成

題材の目標を明確にした上で、題材の評価規準と指導の計画を作成する。その上で学習活動に即して題材の評価規準を具体化する。その際、必要に応じて「指導に生かす評価」や「記録に残す評価」を位置付けるなど、一人一人の観点別の学習状況を的確に捉え、個に応じた適切な指導や支援につなぐことができるようにする。

◆◆◆ 体育科 ◆◆◆

体育や保健の見方・考え方が働く授業の構想

教材となる運動の特性や魅力、健康に関する情報や課題を的確に捉え、学習形態やルール、教具等を工夫することや、子供の実態や思い、願いを大切にしながら単元を構想することが基本となる。その上で、子供が体育や保健の見方・考え方を働かせている姿を授業の中心にすることで、子供が運動の楽しさや喜びを味わったり、健康で安全な生活への実践意欲が高まったりする学習が実現される。

対話を効果的に取り入れた授業づくり

体育科ならではの対話的な場面において、友達の様子を見合い、教え合う場面や作戦を選ぶ場面、学級全体で考えを聞き合う場面等、子供が仲間とどのように関わるのかを具体的に想定し、子供の思考・判断を促すために必要な支援を工夫して関わる。それが、学習課題の設定場面や振り返り場面での新たな気づきや動機付けにつながる。

子供の動きの要因にアプローチできるようにするための教材研究

子供が肯定的な体育の見方・考え方を働かせるには、「できた」という経験や「できそう」という手応えが重要である。その子がしようと思っていることやつまづきに対して教師は共感的に理解し、的確に指導・支援を行う必要がある。子供の観察や子供とのやり取りを生かし、柔軟に組み替えながら指導・支援を行う。

◆◆◆ 道徳科 ◆◆◆

主題の分析

「主題の分析」は、「子供の実態把握」「内容項目の解釈」「教材の分析」から成り立つ。それにより、ねらいが明確になり、発問や板書等の学習指導の構想に役立てることができる。また、子供の多様な考え方を予測したり、それぞれの子供のよさを見いだしたりして、子供の成長を捉える手がかりとすることができる。

対話的な状況を生み出すための教師の働きかけ

対話的な状況を生み出すには、教師の問い返しや揺さぶり等を通して、子供の発言に立ち止まる場をつくり、子供の発言の違いを捉えて他の子供と関わらせることが大切である。特に次の二つに重点を置きたい。

① 「内容項目同士の違い」を捉える

内容項目の解釈を生かし、子供の考えがどの内容項目に支えられているのか、その違いを捉える。主題の分析を基に、子供の発言を捉えたと、内容項目に対する一人一人の具体的な捉え方の違いが分かる。

② 「考え方の視点の違い」を捉える

どうしてそのように考えるのか、発言の背景にある経験や真意等を探る。一人一人の背景を想像しながら子供の発言を聴くことで、経験に基づいた子供の潜在的なよさを自覚化させたり、周囲の仲間とそのよさを広めたりすることができる。

◆◆ 外国語活動・外国語科 ◆◆

指導計画の工夫

バックワードデザインに基づき、ゴールの姿を明確にした単元構成にすることにより、子供は見通しと目的意識をもって活動に取り組む。また、自分の考えや気持ちをより豊かに伝え合うことができるように、新しく出会う語彙や表現に慣れ親しんだり、表現を工夫したりするなど、伝え合うことへの意欲が高まるような生きたコミュニケーションを仕組むことが大切である。

言語活動の充実

単元の目標を踏まえて、実際に英語を使用し、互いの考えや気持ちを伝え合う必然性のある場面を設定する。中学年では、子供が聞いたり話したりする必然性のある場面を設定し、コミュニケーションを図る楽しさを体験できるようにする。高学年では、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を明確にし、自分の考えや気持ちを伝え合う言語活動を繰り返し取り入れることで、授業に占める言語活動の割合を増やしていくことが大切である。

評価の工夫

学習到達目標を年間指導計画に位置付け、子供にどのような英語力が身に付くか、英語を用いて何ができるようになるかをあらかじめ明らかにする。各単元においては、観点別の学習状況について、毎回の授業ではなく、評価の場を精選して適切に評価を行う。その際、評価基準を教師間やALT・JTEと共有することで、一貫した指導や支援を行い、公平に評価を行うようにする。また、子供と共有することで、具体的にどのような姿を目指すのか明確な目標をもって学習に取り組むことができるようにする。1時間ごとの学習においては、振り返りカードを活用し、子供が自己の学びを振り返りながら学習を進められるようにすることが大切である。

◆◆◆ 特別活動 ◆◆◆

人間関係形成 <築きたい人間関係>

「個と個」や「個と集団」の関わりの中で、互いのよさを生かし、協働して取り組み、よりよい人間関係を築こうとする視点。必要な資質・能力は、集団の中において、特別活動の学習過程全体を通して、個人と個人あるいは個人と集団という関係性の中で育まれると考えられる。違いを認め合い、みんなと共に生きていく力を育てる。

社会参画 <つくりたい社会>

児童が現在、そして将来に所属する様々な集団や社会に対して積極的に関わり、よりよいものにしていくとする視点。必要な資質・能力は、自発的、自治的な活動を通して、個人が集団へ関与する中で育まれると考えられる。よりよい集団や社会をつくらうとする力を育てる。

自己実現 <なりたい自分>

将来を見通して、今の自分にできることを考え、よさや可能性を生かして実践しながら、よりよい自分づくりを目指す視点。必要な資質・能力は、自己の理解を深め、自己のよさや可能性を生かす力、自己の在り方や生き方を考え設計する力など、集団の中において、個々人が共通して当面する現在及び将来に関わる課題を考察する中で育まれると考えられる。なりたい自分に向けてがんばる力を育てる。

◆◆◆ 特別支援教育 ◆◆◆

主体的・対話的に探究する

「主体的」とは、自らの意思で進んで活動に取り組もうとする子供の姿を指す。特別な配慮が必要な子供にとっても「主体的に探究する」ことは、自らの興味・関心に基づいて自身で問題を発見し、解決していくための重要な学び方である。なぜなら「探究する」ことによって、知識・技能を習得するだけでなく、自身の思考力・判断力・表現力等を養えるからである。

「対話的」とは、教材や題材、人や自然、社会等の様々な事象との対話、友達等他者との対話、自己の内面との対話を通して、様々な対象「人・もの・こと」について捉えようとする子供の姿である。これらの対話が相互に関連し合って、それまで認識できていなかったことに気付いたり、友達等周りの人との関係性を見直したりできる。特に友達との対話は、特別な配慮の必要な子供が一人では解決するのが困難な時に、自分なりの考えを見いだす助けになり、新たな自己のよさを発見することにつながる。対話の前後で自分の考えが広まったり深まったりすることで、主体的な思考を続けていくのである。

自らのくらしを豊かにしていく

子供が主体的・対話的に探究することで、自立と社会参加に向けて、自らくらしに働きかけ、自らの在りようを変えていく子供の姿である。子供は、学校、家庭、地域社会と様々な場でくらししている。それぞれの場で得られた成功体験が、次の活動への意欲付けとなったり、他の場にも反映させて意識的に生かしたりする子供の姿につながる。

◆◆◆ 保 健 ◆◆◆

カリキュラム・マネジメント

保健教育は、体育科保健領域、特別活動、総合的な学習の時間等、関連する教科等でそれぞれの特質に応じて実施し、それらを相互に関連させて、指導できるように努める。

子供が健康づくりに主体的・対話的に取り組むための指導の工夫

子供が、健康な生活を送るための課題を自分事として捉え、学習活動の見通しをもちながら課題の解決に取り組むことができる学習過程を仕組む。

また、自分の考えと友達のことを比べたり、友達の考えに質問したりすることで、さらに自分の考えを深めることができるように、ペア学習やグループでの話し合い等、効果的な学習形態を取り入れる。

子供の健康な発達を支える協力体制の充実

養護教諭は、その専門性を生かし、各教科等や特別活動等における指導に参画していく。

子供が健康づくりを実践していけるよう、学校、家庭、地域社会が相互に協力し、健康生活をサポートする体制の充実に努める。